

## いつまでも続いていける農と暮らしを目指して

ななくさ農園 関 元弘

2011年3月11日14:46。午前中発生した火災への出動を終え装備を片付けている時に大きな揺れに見舞われました。

私が有機農業をしている二本松市東和地区は、地震による被害は軽微でしたが、引き続き発生した未曾有の原子力災害に翻弄されました。幸運なことに避難することなく営農を継続できていますが、福島第一原子力発電所から北西に45kmのところであり、地区の東端の山の向こうは計画的避難区域の川俣町山木屋地区となっていることから物心両面で影響を受け続けています。

震災のあった年は、当地に新規就農して5年目の年で、地域の有機農家と新しいグループ「オーガニックふくしま安達」を立ち上げ、地元農協を始めとした様々な方々のご尽力により、首都圏への計画的・組織的出荷を始めようとしており、地震により設立総会の日をずらしたものの、その年の夏からの出荷を始めることができました。

1、2年目は復興支援的な意味合いもあり、順調に売り上げを伸ばしましたが、3年目の昨年は対前年比5%という驚くべき数字となってしまいました。有機農産物は「安全・安心」を売りにしているのだからワザワザ福島県産を扱う理由はなく、他産地で入手できない時のみ買いたいというのが業者の本音です。この3年間で、業者は代替産地を確保した模様です。薄々気が付いていましたが、いざ数字になると怖いものです。

原発事故から3年経ち、空間線量は低減し、

ほとんどの作物でND(不検出)となる状況になっていますが、安全・安心のため有機農産物を選んでいた消費者にとっては、数字は問題ではなく、そもそも福島産自体ダメなのでしょう。そのような敏感な消費者を相手に商売している業者に対してNDだから買ってくれというのは無理な話です。

生産者は農産物の生産に勤しむべきですが、だからといって販売を他人任せにしているのは今の事態を突破することはできませんので、心機一転、メンバー全員が営業マンということで新たな売り先探しに奔走しています。

その過程で、今まで通り「有機農産物だから安全・安心」、「放射能を測っているから安全」というのではなく、低投入で循環型の「人と環境に優しい農業・農産物」という点にアピールの軸足を移さねばならないと考えております。そもそも有機農業は、人と環境に優しい、いつまでも続いていくことが目的であって、農産物が美味しい、安全・安心というのはオマケでしかないのですから、これを良い転機に修正していきたいと考えております。

有機農業に取り組む意味を再確認し、里山資源も活用した低投入・循環型の、いつまでも続いていける農と暮らしを目指したいと改めて実感すると共に、それを実現することが、未曾有の原子力災害に遭った福島で農業を続けていくことへの答えなのかも知れません。何年掛かろうとも実現できるように努力していきたいと思っております。

(せき もとひろ)